



# リハーサル通りに

12月21日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 12月21日のおはなし「リハーサル通りに」

階下から馬鹿笑いが聞こえてきて目を覚まされた。暗闇の中でしばらく横たわったまま、また眠り直そうかどうしようかと思っていたが、あまりに楽しげな笑い声があるので様子を見に行くことにした。何と言っても同じチームのメンバーだ。友好を深めるのも、ものごとを成功に導く秘訣ではある。

階段を降りると、ちょうど正面のソファに座っていたミスター・ジョージが声をかけてきた。「いよっ、真打ちの登場だな」「楽しそうだから仲間に入れてもらおうと思ってな」ミスター・ジョージというのはもちろん偽名だ。コードネームのようなものだ。寄せ集めのメンバーの本名をお互いに伏せるため、こんな呼び名をつけた。もちろん洒落だ。本当は全員日本人だ。

ミスター・リングが立ち上がって振り向き、人なつっこい笑顔で迎え入れてくれる。ミスター・リングはメンバーの中で唯一初老で、礼儀正しく、コミュニケーションも取りやすい。あとの3人のように突然切れて騒ぎ出すこともない。ミスター・ポールとミスター・ジョンは馬鹿笑いの余韻を残した顔のままこちらに向かって頷く。わたしはミスター・リングが差し出してくれた缶ビールを開け、一口飲む。

「調子はどうだ？」  
「つまねーこと聞くなよ」ミスター・ジョンが言う。「リハーサル通りに。あんたの描いた青写真通りに全ては運ぶ。まかせなって」  
「それを聞いて安心した」わたしは缶ビールをもう一口飲んで尋ねる。「何の話をしていたんだ？」  
「いままでにドジ踏んだときの話だよ」とミスター・ジョージ。  
「縁起でもない」  
「でもおかしいんだって！」

それから4人が口々にそれぞれの失敗談を話し始める。ミスター・ポールの話は以前のヤマで組んだイカレポンチのとんでもないエピソードだった。銀行強盗に踏み込んで早々3人も意味なく射殺したくせに、逃走中のクルマがネコをはねてしまうと突然泣き出して、挙げ句に運転していた仲間を射殺してしまったという、まるで笑えない話だったが、“ザ・ビートルズ”の4人には大受けだった。ミスター・ポールが、「水道管の調子が悪くて」とでもいうような困った表情で話すのがおかしいのだろう。

ミスター・リングの話は期待通りナンセンスな笑いに満ちていたが、よくよく聞いてみると別に失敗談でも何でもなく、ターゲットの邸宅に入ってから盗み終えて出てくるまでどれだけハラハラし通しだったかというだけの他愛もない話だった。でも話全体がよくできていて面白かった。何度も嘔き出してしまった。

ミスター・ジョンの話はシュールすぎてよくわからなかったが、人望だろうか、全員が手を叩いて笑っていた。殺してしまった金持ち夫婦の遺体を間違えて何度も踏んづける話のどこが面白いものかと思ったが、そんな大人げないことは言わず、わたしも合わせて笑っておいた。そんな4人の話の中で、警察官が犯行現場の検証をしている真っ最中にその部屋に侵入してしまったミスター・ジョージの話がピカイチにおかしかった。

「このヤマが終わったらどうするんだ、みんな？」  
笑いがおさまった頃、私が尋ねるとまずミスター・ジョージが即答で返事をした。  
「チベットに行く」  
「チベット？」

「そう。これはもう夢だったんだ。寺院に入って修行する」  
「はあ？」ミスター・ポールが聞く。「坊さん志願者がどうしてこんな仕事しているんだ？」  
「いいじゃないか」わたしはそれぞれの価値観までどうこうする気はないので言った。「チベットに行って坊さんになるために地下金庫を破る。結構なこった」  
「修行をする前に落ちるところまで落ちなきゃいけないんだ」ややせっぱ詰まった調子でミスター・ジョージは言う。「盗み、犯し、殺す」

わたしは聞かなかつた振りをして話を先に進めた。  
「ミスター・ポールの予定は？」  
「おれは遊ぶよ。南の島に行って飲んで食って使えるだけ金を使って遊べるだけ遊ぶ」何やら不満そうにミスター・ポールは言う。チベットの話が意外すぎて少し鼻白んだらしい。くだらないプライドだ。「女の子を連れてケイコス島に行く」  
「ケイコス島って何だ？」  
ミスター・リングが聞くと、ミスター・ポールは肩をすくめて首を横に振る。  
「知るもんか。彼女がそこでイルカと泳ぐんだってさ」  
「なんだよ。女の子を連れて行くんじゃないかと、お前が連れていってもらうんじゃないか」  
みんながどっと笑う。

「いやだねえ刹那的な生き方は」ミスター・ジョンがバカにした調子で言う。「いまさえ良ければいいってもんじゃないぜ」  
「ミスター・ジョンはどうするんだ？」  
「愛だよ。愛こそがすべてさ」似合わないことを言うのでみんなが笑う。「やってやってやりまくる。金の続く限り。なびく女のいる限り」  
「どっちが刹那的だ」ミスター・ポールは半ば本気で怒っている。「何も残らないじゃないか」  
「そう！」ミスター・ジョンは言う。「おれのは刹那“的”じゃなくて刹那“主義”なんだ。ほんものの刹那に、一瞬にすべてをかけるんだ」

「だれがいい話をしろって言った？」とミスター・ジョージ。またみんなが笑う。「プロデューサーさんはどうするんだよ？」  
4人がわたしを見る。わたしは微笑んで、正直に答える。  
「次の仕事にかかるだけだ」  
「ひい〜っ！」ミスター・ジョージは素っ頓狂な声を上げる。「この山が終わっても、まだ儲け足りないってか？ 仕事の鬼なのか、刹那主義の親玉なのか？」  
「ミスター・リングは？」ミスター・ジョンが尋ねる。「これが終わったらどうするんだ？」

ミスター・リングはちらっとわたしの方を見る。わたしはうなずく。次の瞬間、ミスター・リングは何度も練習したとおりに拳銃を抜き、ミスター・ジョン、ミスター・ジョージ、ミスター・ポールの順に射殺した。予想通り、拳銃に手をかけられたのはミスター・ジョージだけだった。

全てが終わるとミスター・リングは、というよりも、わたしの依頼人の橋本氏は拳銃をテーブルの上に置き、泣き出した。わたしは橋本氏の肩を叩き「よかったですね」と声をかける。

「うまく行ったじゃないですか。娘さんの仇が取れて。大丈夫これでもう終わりです。あとはわたしがやりますから、橋本さんは前に話したとおりにキレイに身体を洗って、着替えていて下さい」と言った。それからわたしは部屋の片付けにかかったが、その間も橋本氏はその場でずっと身を震わせて泣き続けていた。

(「刹那」 ordered by くーsan/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

リハーサル通りに(微修正版)

<http://p.booklog.jp/book/40929>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40929>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40929>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.